

食事摂取量の改善を目指して

～体重の増加を目指し体力をつけたい～

施設名：介護老人保健施設もとぶふくぎの里

発表者：玉城毅 黒木美樹

【はじめに】

当施設は平成10年から在宅復帰を目的とした中間施設（在宅復帰支援施設）として開設した。しかし入所されている利用者様すべてが在宅復帰を行なえるわけではなく、老人ホームやその他自宅以外へ退所される利用者様も少なくはない。その様な中、平成31年4月8日ふくぎの里へ入所され、令和1年7月31日自宅へ退所。令和1年8月2日より当通所リハビリテーション科を利用された利用者様がいます。利用当初から食事摂取量が少なく、食事以外に栄養補助食品も摂取されていた利用者様へ対し、食具の工夫（スプーン）を行う事で食事摂取量の改善が図れた事例が有る為、ここに報告する。

【事例紹介】

《氏名》 T 様《男性》

《傷病名》

※パーキンソン症候群

※老人性うつ病

※脳梗塞後

《生活歴》

沖縄県の両親の長男として大阪府にて出生。生後本部町へ戻り新里にて育つ。中学卒業後11年ほど大工として生活を送り、その後ダンプや重機を扱う土建業を平成15年まで営む。（28歳で結婚。1男4女を授かる）。

【取り組み】

利用当初食事摂取量が2割～3割前後と少なく、介助も拒否される状況で有った。食事の姿勢は良かったため、スプーンの種類をかえる事で食事摂取量の増加を図れるのではないかと考え数種類のスプーンを提供し試みた。

①最初にAスプーンを（長さ14cm）、提供。

②次にBスプーンを（長さ18cm）提供。

③Cスプーンを（長さ19cm）、提供。

※味噌汁に関しては御家族様より強い希望が有り、硬めにトロミを付けて提供。（飲む味噌汁ではなく、食べる味噌汁）

【結果】

①Aのスプーン。食材を取る事はスムーズに出来たが、柄が短い為、口へ運ぶ際に食材が落ちる事が多少見られた。本人様より「使いにくい」との申し出が有った為、1週間で終了となる。

②Bのスプーン。食材を取り込み口に運ぶことはスムーズに出来たが、食材を受ける部分が大さいとの申し出が有り、1週間で終了となる。

③Cのスプーン。柄の部分が握りやすく食べやすい、又食材を受ける所が小さめの為使いやすいとの申し出が有った為、Cのスプーンを提供し様子を見る事となる。令和1年8月の利用当初は3割前後の食事摂取量であったが、9月・10月・11月・12月と摂取量の増加が見られた。Cのスプーンを使用し、令和1年8月から令和4年までの期間、多少の摂取量の増減は見られたが、令和4年8月現在、ほぼ10割前後の摂取量となっている。

【考察】

T様は食事介助の拒否が強く、自力で食べたいと言う思いが強い状況であった。その様な中でご自分に適した食具を使用する事により、食事摂取量の増加につながったと考える。又T様はご自分で「痩せすぎ。食事をきちんと食べて体重を増やし体力をつけたい。家族に迷惑をかけたくない」と頻繁に言われていた。御家族様の介護負担等の心配もされた事も、食事摂取量の増加につながったとも考えられる。

【おわりに】

高齢者の低栄養に伴う免疫力の低下は様々な感染症を引き起こし、摂食嚥下機能が低下した場合は誤嚥性肺炎を発症するリスクが高いと言える、との報告もある。T様は人間の基本的欲求である「食べる楽しみ」を自ら行う事で食事摂取量の改善につながったのではないかと考える。又食事量の増加に伴い、体重も増加してきた。令和1年8月の利用当初は46Kgと痩せ傾向であったが、R4年8月現在57、6kg前後と（約10Kg増量）適正体重を維持されている。しかし御家族様は食事摂取量の増加や適正体重に近づいた事に関しては喜んでいますが、「さらに体重が増え続ける事で介護が困難になるのではないかと。高齢で女性の私が介護出来る体重でいてほしい」との申し出もされる様になって来た。今後、定期的な体重測定を行い、適時、医師、看護師、管理栄養士等の助言をいただきながら、T様の安全な在宅生活の支援に関わって行きたいと考える。